

## 新・旧「大陸」間を巡る初期近代視覚文化再考

(司会・講師) 成城大学教授 松田 美作子  
(講師) 青山学院大学教授 山本 真司  
(講師) 日本大学特任教授 植月 恵一郎  
(講師) 慶應義塾大学名誉教授 巽 孝之

### [概要]

初期近代英国は、言語芸術に比べて視覚芸術の成果が乏しいと言われてきたが、近年、エリザベス・ゴールドリングらの研究に拠って、君主の地方への行幸（プログレス）やパジャントなどに用いられる視覚的なイメージが、従来考えられていたより大きなインパクトをもっていたことが検証されている。それらは英国のみならず、大西洋を渡って新大陸の文学や文化にも多様な影響を及ぼしている。そこで本シンポジウムでは、宗教改革以降の新教徒の移動にともなうイメージの受容と変容に注目し、主に新・旧「大陸」間におけるエンブレムなどのプリントに描かれた図像を取り上げ、視覚文化の展開と変遷を再考する。具体的には、エンブレムブック作成の動機に宗教や政治と密接に関わっていたことを指摘し、17世紀に入って個人の信心のためにエンブレムが変容した過程や、エンブレムブックのエンブレムが物質文化において応用され、それらが新大陸に持ち込まれて受容された点を追求する。さらに、ルネサンスの人文主義的なエンブレムの伝統的寓意が、新大陸のピューリタン文学に影響を与えたことや、新大陸を表わす女性像が、いかにアメリカニズムを構築していくかをピューリタン文学も含めて検証する。空間的な広がりの中、視覚的想像力がテキストと結びついて生み出す文化の実相に迫りたい。

## 初期近代英国の視覚文化の展開—ut pictura poesis から ut pictura meditatio へ

松田美作子

16, 17世紀の視覚文化の特質として、言語芸術と視覚芸術の相関が常に挙げられる。ut pictura poesis に集約されるこの姉妹関係をもっともよく表しているジャンルが、ルネサンス期ヨーロッパで流行したエンブレムである。モットー、図像、そして図像の説明をする詩文の3部位で構成されるエンブレムは、美術や文学の作品にイメージのソースを提供するとともに、エンブレムブックとして出版されて、当時の社会や文化に結節するさまざまな影響を与えた。初期近代英国は、文学作品には圧倒的な豊かな実りがみられる一方で、美術作品にはニコラス・ヒリアードらの細密肖像画に優れた作品がある程度で、「大陸」に比べて成果は乏しいと言われている。しかし、図像を寓意的に解釈し、新たな意味を生み出す伝統は、「大陸」の影響下で英国の視覚文化にも浸透していた。エンブレムを、古代神話、神聖文字、聖書、金言やイソップなど、ヒューマニスト運動によって復活した文学的伝統から生成されたルネサンス期を代表するディバイスと考えるならば、エンブレムブックはその点を明確に示している。

最初のエンブレムブックと認められているアンドレア・アルチャートの『エンブレム集』（アウグスブルク、1534）以来、英国における大陸のエンブレム受容は、たとえば1548年、バルテルミー・アノーに拠るアルチャートの仏訳本が、スコットランド貴族ジェームズ・ハミルトン、第2代アラン伯に献呈されたという事実からもうかがい知れる。しかしその実例はむしろ、馬上槍試合で騎士の持つ盾に描かれた標章、パジャントの山車に飾られた擬人像、肖像画、建築物、食器などの日用品やハットピンなどの装飾品にあまた残されている。寓意的意味を込めたエンブレムのイメージが、日常生活の多くに場面において基層をなし、イメージの背後に意味を読み取る文化の存在は、シェイクスピアのような劇詩人や知的エリート層でなくとも、一般民衆にも知られていたであろう。

こうしたエンブレム的なイメージを自己成型に最大限利用したのは、レスター伯であった。近年、エリザベス・ゴールドリングらの詳細な研究に拠って、レスター伯は、ケニルワースの大饗宴に代表されるような視覚的効果の高い演出家、美術収集家として再評価されている。<sup>1</sup>伯はまた、ハプスブルク家の圧政に苦しむネーデルラントの改革派を助けるための援軍派遣を推し進めたが、そのことはジェフェリー・ホイットニーの『エンブレム選集』（ライデン、1586）出版の動機となった。レスター伯のみならず、ネーデルラントのヤヌス・



図 1 : Geoffrey Whitney, *A Choice of Emblems*, p.203



図 2 : Francis Quarles, *Emblemes*, 4:15

ドウサを中心とするヒューマニストたちは、このエンブレム集が遠征軍のよきプロパガンダになることを望んだのである。<sup>2</sup> エリザベスの馬引き係、リチャード・ドレイクに捧げたエンブレム [図 1] は政治的意図をあらわす好例である。これは、サー・フランシス・ドレイクの世界周航を讃えているもので、“put a girdle round (around) the earth” という成句のもととなった図像であるとされる。モットーは“auxilio divino” (神の助力よって) である。詩文ではドレイクの航海が苦難や危険に遭遇するのをアルゴ船の金の羊毛探求と比べ、新たな富をもたらす土地 (新大陸) への期待が述べられている。人文主義的エンブレムでは、危険な航海を成功に導くのは、アルゴ船のパイロット、ティーピュスであるが、ホイットニーのエンブレムは、神の助力によってドレイクの航海が成功したことを強調する。実際、ドレイクは私掠船として莫大な富をスペイン船から奪ったのみならず、新たな航路を開拓し、英国の海外貿易発展の糸口を拓くのだが、こうした経済活動を神の助力と結び付け、ホイットニーはレスター伯の遠征が真の宗教を擁護する目的であることに配慮している。この姿勢は、フランスのユグノー、ジョルジェット・ド・モントネの『キリスト教的エンブレム集』(リヨン、1571) から借用したエンブレムを用いていることから理解できる。

16, 17 世紀においては、人文主義的で教訓的なエンブレムブックより、宗教改革の進展とともに、新・旧両派による自らの信条を訴える宗教的エンブレムブックほうが圧倒的に数多く出版されている。英国においても、チャールズ一世とロード大主教の専制が議会との対立を深めるころ、1635 年に出版されたフランシス・クォールズの『エンブレム集』は、カトリック派のエンブレム図像を用いながら、もとのエンブレムの詩文をプロテスタント的な瞑想に合うよう整えた折衷的エンブレムである。同年中に再版されて人気を博し、新大陸でも読まれ、20 世紀初頭まで出版され続けた。クォールズは、ロヨラの『霊操』の方式であるキリストの受難を想う「場所の創設」をプロテスタント派の瞑想に応用し、室内でも戸外でも、また受難の場面に限らず日常の経験、「もの」や景色を対象としても瞑想が実践可能としたのである。図像とテキストに加えて、聴覚にも配慮している。クォールズは『エンブレム集』冒頭の“Invocation” (「希求の祈り」)において、神の栄光を歌う詩人たらん決意を述べ、22 点のエンブレムのモットーを詩篇歌として改革派が重視した「詩篇」から採用している。<sup>3</sup> たとえば、エンブレム 4 : 15 では、“How shall we sing of the Lord in a strange land?” (「詩篇」

137. 4) をモットーとして、バビロン捕囚に苦しむイスラエルの嘆きを、打ち捨てられているようにみえるリュートや川辺に立つ人物の図版 [図 2] と組み合わせる。ルネサンス期の文芸伝統では、リュートや「希求の祈り」で言及されるテオルボといった弦楽器は、弦を調律することで美しい楽音を奏することから、魂を神に合わせて整えることの比喩に用いられる。アポロンの楽器である 7 本弦のリュートは、人間の魂の象徴であった。<sup>4</sup> クォールズは、オルフェウス神話を霊的に利用して、冥界のエウリュディケーを地獄のごとき地に捕らわれた〈アニマ〉にたとえている。

以上の例が示すように、初期近代英国は「大陸」のエンブレム文化を人文主義的な教えを普及させるのみならず、宗教的な目的にも大いに活用した。そうしたエンブレムブックは新大陸にも受容され、変容しながら消費されていくことになるのである。

1 エリザベスの巡幸と関わるレスター伯に関する資料は、以下を参照。Elizabeth Goldring, Faith Earles, and Jayne Elizabeth Archer, eds., *John Nichols's The Progresses and Public Processions of Queen Elizabeth I: A New Edition of the Early Modern Sources* (Oxford: Oxford University Press, 2007) また、レスター伯と視覚芸術については、Elizabeth Goldring, *Robert Dudley Earl of Leicester and the World of Elizabethan Art* (New haven: Yale University Press, 2014)にとくに詳述されている。  
 2 レスター伯とネーデルラントとの関係、とくに遠征については F. G. Oosterhoff, *Leicester and the Netherlands, 1586-1587* (Utrecht: HES Publisher, 1988) に詳しい。  
 3 ルターやカルヴァン以来、改革派にとっていかに「詩篇」や詩篇歌が重要であったかについては、Hannibal Hamlin, *Psalm Culture and Early Modern English Literature* (Cambridge: Cambridge University Press, 2004)を参

照。

4 ルネサンス期の音楽表象については、Elena Laura Calogero, *Ideas and Images of Music in English and Continental Emblem Books 1550-1700* (Baden-Baden: Valentin Korner, 2009)を参照。

## 大陸間「移動」からみるバンケット・トレンチャーの物質・視覚文化的意味

山本 真司

宗教改革後、オランダ移民やユグノーの流入により社会的恩恵を受けた英国は、16世紀後半から17世紀前半にかけてイコノクラストからイコノフォビアへと展開する過程で大きな物質・視覚文化的発展をとげている。膨張する一方の世界に対する漠然とした不安感、かえって小部屋で実践される瞑想や空想といった思考空間への志向をも助長したが、エンブレムブックもその一助となったメディアのひとつである。また、エンブレムの図像は、モットー（題銘）やエピグラム（詩文）よりも多く様々な装飾（美術）に用いられたが、その痕跡は、例えばタペストリー以外には、天井画や壁画、そしてバンケット（デザート）・トレンチャーなどにわずかに残っているのみである。本発表では、主に米国東海岸のMET美術館収蔵のバンケット・トレンチャーのイメージとテキストを、ロンドンの博物館に残されたものと比較しながら分析することにより、英国からの「移動」によって物質・視覚文化的意味がどのように変化したかということだけでなく、そもそもなぜわざわざ「それ」をもって「移動」したのかという謎を探求してみたい。

### ノリッジの異人館(The Strangers' Hall)

洋服商によって建てられたノリッジの邸宅「(後の通称)異人館」にやってきた「異人たち」は、カトリック教スペインによる宗教弾圧によって低地諸国を追われたオランダ人やフランドル人、そしてワールーン人の毛織職人たちであった。エリザベス女王統治下のイングランドではそのような移民たちを積極的に受け入れていた。ロンドンやノリッジでは毛織物などの技術を持つ移民たちの経済的価値を重要視したため社会的影響も大きく、その文化的影響は当時の絵画だけでなく、裕福な市民の家屋に残された壁画、家具、食器、そしてタピスリーなどの装飾芸術の一端においても確認することができる。

### ニューイングランド王領印(1686)

米国東部の植民地化を進めていた英国王と現地人の関係を、ニューイングランド王領印などにみることができる。そこに見られるのは、ローマ硬貨などから継承された図像学的な意匠を応用したエンブレム的な構図である。

### 17世紀後半の英国大西洋世界と植民地印

17世紀後半になると英国は、大西洋世界との関係をさらに強化するためにさまざまな政策を打ち出すが、それらはマサチューセッツ湾植民地印などの図像と文言の変遷にも反映されている。

### 元プリマス植民地知事エドワード・ウィンズロー所有のバンケット・トレンチャー（プリマス、ピルグリム・ホール博物館）

アメリカ東部プリマスにあるピルグリム・ホール博物館収蔵のバンケット・トレンチャーは、元プリマス植民地知事エドワード・ウィンズロー所有とされている。これはエンブレム図像や英国の王侯貴族など多くのすぐれた図版を製作したクリスピン・ド・パセ(1595-1612)による版画に基づいており、イングランドとオランダのプロテスタント的繋がりや強さを示すとともに、バンケットに関連する文化的継承が大西洋を越えて行われていることの証左ともなっている。

### ウィンズロー家の紋章とモットー

プリマスに渡ったウィンズロー家の紋章はエンブレムの伝統の影響を色濃く受けたものであり、のちに作成させたモットーも断絶を超えて栄えることを願ったものとなり、当時の多くの移民の文化的心性の一端を反映したものとなっている。

### ドイツ伝統菓子シュプリングレーレとエンブレムの思考／象徴的心性（思考様式）

英国に伝わったバンケット菓子の伝統と当時の役割を理解する上で、その焼き型の意匠を調査研究する重要性が明らかになっている。たとえば、ドイツ伝統菓子シュプリングレーレにおいてもエンブレムの思考／象徴的心性（思考様式）を明らかにしようとする研究が進められている。

### 食卓と食前の祈り・・・ラテン語銘：コブハム(William Brooke)一家の肖像 (1567)

英国初期近代における家族の肖像画の歴史において、コブハム(William Brooke)一家の肖像 (1567)は重要な位

置を占めている。特に画中に記録されているラテン語銘の分析は、バンケットの食卓と食前の祈りが表象するプロテスタント的家族像と子孫繁栄の図像学との関係を明らかにするために有効である。

### 近代的（核）家族の肖像・・・食卓、祝福と豊穡

聖書からの引用については、詩編 128 の家庭の幸福についての詩文が図像の構成の根拠となり、食卓に祝福と豊穡の意味を与えることにより、近代的（核）家族の肖像を形作っている。

### 果物を切ることができないトレンチャー（＝本）の比喩—ジョン・ヘイウッド

ジョン・ヘイウッド（1497?-1580?）が援用する果物を切ることができないトレンチャー（＝本）の比喩は、食事という行為が、本＝聖書代わりのトレンチャーを読む行為と深く結び付けられていることを示している。

### ギフトとしての愛誦句・・・エピグラム＝塩の効用 by ジョージ・パットナム

ジョージ・パットナムは、さらにギフトとしての愛誦句の役割を強調するとともに、宮廷におけるポーズと呼ばれる短い短詩（エピグラム）が持つ塩の効用について指摘している。

#### （甘みと辛み）の組み合わせ by ロザリー・コリー

ロザリー・L・コリーの「エピグラムは、伝統的に社会的態度や社会的作法を凝縮したものであって、社会が前提とする規範に個人の偏倚が衝突するさまを解釈する故のものであるゆえ、エピグラムは、ソネット詩人が定番とする愛の埒外にある種類の愛を扱うための言語を可能にすることによって、詩人がみごとな成果をあげることに貢献したのである」（『シェイクスピアの生ける芸術』（2016, p. 212）という指摘は、詩文と図絵を組み合わせたバンケット・トレンチャーのエンブレム的な要素や構成そのものが、「甘みと辛み」といった絶妙な組み合わせとなっていることを改めて理解する助けとなる。

### チーズ・トレンチャーの精神的作用—気散じ（レクリエーション）の勧め

ロバート・バートン（1577-1640）は、『憂鬱の解剖』（1621）において、チーズ・トレンチャーや絵入り布が精神的作用として気散じ（レクリエーション）の役割を果たすことを指摘している。これは近親者のみでプライベートな空間で楽しむバンケットという特殊な食文化の知的および健康的側面を強調したものである。

### エラスムス学習法—金言・諺・格言を絶えず目の前に

エンブレムの文字と図版の組み合わせが、初期近代の宴会実践の過程でバンケット・トレンチャーという物質文化を生み出すことになったわけであるが、その有用性の起源は元来、金言・諺・格言を絶えず目の前においておくようにという、エラスムスの視覚的ツールを活用した学習法の勧めにあったのではないだろうか。

Desiderius Erasmus and Craig R. Thompson. *De Copia: De Ratione Studii. Collected Works of Erasmus*. Vol. v. 24 .  
*Literary and educational writings*; 2: University of Toronto Press, 1978, p.671.)

### 英国に移入されたエンブレムや諺

英国家庭の物質文化においてエンブレムや諺は、エンブレム図絵・イソップ寓話・植物果物図絵・人物図絵詩文・聖書挿絵・引用・諺箴言といった主題によって、独自の発展・応用・多様化を遂げることになる。

Tara Hamling. *A Day at Home in Early Modern England*. Yale University Press, 2017

---. *Decorating the 'Godly' Household*. Paul Mellon Centre for Studies in British Art, 2010.

### 英国のエンブレムと物質文化

英国のエンブレムが物質文化においてみられるのは、主に、住居と移動（dwelling & travel）（墓碑・真鍮碑・建造物・装飾され壁と天井・絵画と肖像画・船・旗軍旗武器具・タピスリー・刺繍・宝飾品銀器時計衣服などにおいてである。

ピーター・デイリー著、伊藤博明訳編『英国のエンブレムと物質文化』2010

### バンケット・トレンチャーの様々な用途

印刷術の発展と亡命ユグノーの流入（1560年代以降）により、大陸の技芸家の大量移動とともに Text+Image も英国、そして米国へと移動することとなった。バンケット・トレンチャーに表象された七大罪に対抗する美德への戒めは、テキストとイメージが融合した形でギフト交換用・瞑想用・移動携帯用・装飾用・バンケット用といった様々な役割を担いながら文化的社会的メッセージを移民とともに伝播させていったのである。

### 携帯用タブレット「本」としてのバンケット・トレンチャー メトロポリタン博物館（MET）収蔵

本型のケースに収納されたトレンチャーは、初期近代の清教徒たちによって長旅の間に道徳集の文言を忘れないように楽しみながら記憶するための携帯用タブレットとして活用されたであろう。

Thomas Becon (1512-1567), *The Governance of Virtue* (1566)

### 預言者および貧者への哀れみの主題：ヨナとラザロ

バンケット・トレンチャーは、預言者や貧者への哀れみを通して神と国王とのつながりを象徴する重要な媒介の一つとして機能していたであろう。

Ballad - Roud Number: 477, Title “Dives and Lazarus” ([Broadside Ballads Online](#))

“Dives and Lazarus” wall paintings of 1580 in the old parlour at Pitleworth Manor, Hampshire (Hamlin2010, pp.132-33)

### 現代のバンケット・トレンチャー？

宴会を開きながらも貧者への哀れみを忘れた金持ちの地獄落ちを説くバンケット・トレンチャーと同様に、初期近代以来の嗜好品であるタバコのパッケージには、喫煙の害をテキストとイメージの両方を用いて効果的に訴えかけるものが現在もあるが、そこにはもはや宗教的意味や王権に関連したシンボリズムは失われ、残されているのは健康被害への警鐘のみである。

“Anti-smoking images on cigarette packs are twice as effective than text-only, ‘smoking kills’ labels” [A picture a thousand ‘smoking kills’ words.](#)

“Studies carried out in Brazil, Canada, Singapore and Thailand revealed that having graphic images on cigarette packets of the consequences of smoking motivates more users to quit and reduces the appeal of taking up smoking for non-users.” [Tobacco kills –get the picture?](#)

## アレゴリーの大陸：ストラディナス以後

巽 孝之

19世紀アメリカ・ロマン派を代表する超越主義思想家ラルフ・ウォルドー・エマソンは、敬愛するスウェーデンの神秘主義者スウェーデンボルグが「自然と魂の力がいかに連動するかを示した」ばかりでなく「五感で知覚しうる現実世界そのものに象徴的ないし霊的な性格 (the emblematic or spiritual character) があると洞察した」と述べている (“Nature” [1837])。

この発想は、19世紀を待たずとも15世紀末、コロンブスの新世界到達以降のヨーロッパによるアメリカ征服戦略としての視覚的類型学として、長く耕されてきた伝統に則る。それは、新世界を見たこともない画家たちが想像力を全開させて描いてきた図像群が如実に反映しているだろう。その端緒は、ネーデルラント系のストラディナスの筆になる作品に基づくフィリップ・ガレの木版画「アメリゴ・ヴェスプッチのアメリカ再発見“Arrival of Amerigo Vespucci in the New World” (1580年頃)に窺われる。そこでは着衣のヨーロッパ人男性が知的な文明、全裸の新世界原住民女性が豊かな自然を表象しているが、しかしこの図像とほぼ同時期に、ガレは後者が前者の首を刈り取る衝撃的な図像「アメリカ」“America” (1579~1600年頃)も制作していた。ステューヴン・グリーンブラットの歴史主義批評の里程標『驚異と占有』(1991年)は、帝国主義的な文明が新世界における驚くほど豊かな自然を、まさにそのような驚異を与えるがゆえに占有してよいとする植民地主義的心理機制を詳らかにしたが、しかしまさにその自然が文明へ反旗を翻し逆攻略しかねない性差政治学的逆転劇の構図も、環大西洋的図像学はあらかじめ組み込んでいたのである。

こうしたジェンダー・ポリティクスが、やがてアングロアメリカの図像学に影響を与え、ホーソーンに代表されるロマン派作家たちが積極的に取り込むことになったのではないかと考えるならば、その伝統を最も人工に膾炙させたメディアとして、17世紀末に初版が出た児童向け教科書『ニューイングランド初等読本』*New-England Primer*の役割を考慮せねばならない。この時期、1690年前後は、ニューイングランドが、とりわけマサチューセッツ植民地が、とんでもない危機の時代を迎えていた。1642年から始まったピューリタン革命はついに1649年、国王チャールズ一世を処刑するに至るが、以後は同革命の立役者オリヴァー・クロムウェル護国卿の逝去を経た1660年の王政復古の結果、1684年にはジェームズ二世の命によりマサチューセッツ湾岸植民地の自治権を認める勅許状がいったん撤回されたからだ。そしてインディアン対策のために組織されたニューイングランド植民地連合 (The United Colonies of New England) を解消して、翌85年には、よりイギリス側の支配にとって都合のいい王領ニューイングランド (Dominion of New England) へ改組するという政変が起こる。かくしてイギリス本国政府は、強大になりつつあったマサチューセッツの力を封じ込めるため、1686年には、豪腕のニューヨーク総督エドモンド・アンドロスを新総督として任命する。かような宗主国による植民地弾圧が、1692年に勃発したセイラムの魔女狩りの一因をも成したことは、改めて強調するまでもない。

かくも危機的な時代に確立したニューイングランド初等教本が教えるABCは、クォールズらの影響を受けた図像学をフル活用したピューリタンの予型論教育としてローマン・カトリックやアングリカンへの抵抗精神を培い、宗主国側の抑圧を植民地側が勇敢に乗り越えて行くためのサバイバル・キットとしても機能した。ABCひとつひとつの活字 (Type)のうちに、キリスト教的予型論タイポロジーでいうところの予型 (Type) が

はっきりと刻み込まれ、それが植民地の子供たちの最初の教育となったところに、初期ニューイングランド初等教育の最大の特徴がある。

たとえば、Aの文字を覚えるのにAdamのAとして覚えさせるために「アダムの墮落のうちに人類の原罪がひそむ」(In Adam's Fall / We Sinned all)なる短い韻文テキストが来るのだが、そこに添えられた図像をじっくり眺めてみれば、エデンの園における知恵の木の実をアダムがいまにももぎ取ろうとしている場面であるのがわかるであろう。そしてJの文字のところではヨブ記の主人公(Job)がフィーチャーされ「ヨブはむち打たれるのを感じながらも神を誉め称えた」(Job feels the Rod / yet blesses GOD)と記される。植民地において苦難と救済の論理が定着するにあたってはインディアン捕囚体験記が大いに貢献したところだが、しかしそれにはるかに先立つ時点で、ピューリタン初等教育のABCがキリスト教的苦難と救済のシナリオを少年少女へ刷り込んでいたのだ。そしてきわめつけは、Aの文字が最初だとしたら、Zの文字が最後に来ているという展開である。そこには最初の間人アダムに対応すべき存在として、イエスの弟子のザアカイ(Zacchaeus)、日本正教会訳聖書では「ザクヘイ」と表記される収税吏が据えられている。そしてテキストはこう読める。「ザアカイは主イエスを一目見ようと木に登った」(Zacheus he / Did climb the Tree / His Lord to see)。イエスの弟子たちの中ではマイナーかもしれないが、ザアカイはなにしろ税金の取り立てをわりわいとしていたのであるから金持ちではあっても「罪深き男」と見られていた。ところがイエス・キリストに出会ってからというもの回心して、自分の財産を他者のために役立つようになり、イエス復活後は使徒パウロを助け、自らもカイサリアの主教となり、星人として記録されるに至っている。そのザアカイがいったいどうして、この図像と関連しているかという、ルカによる福音書第19章をひもとくしかない。ザアカイはもともとエリコの町、今日ではパレスチナ解放機構(PLO)の本部が置かれているオアシスの町で徴税人として暮らしていたが、ある時、噂に聞くイエスがこの町を訪れるというので一目見ようとすも、背が低いために接近するのめかなわないので、桑の樹に登って待ち構えた。すると、通りかかったイエスが、それまで一面識もないのにザアカイを認め、その名を呼び、そして彼の家に泊りたいと申し出るのだ。それによって、ザアカイは完全な回心を経験し、イエスの弟子になるのである。つまり、単純素朴に見えるABC学習の背後には、旧約聖書における樂園追放から新約聖書における罪人回心へ至るピューリタンの救済史が、巧妙に刷り込まれているのである。

してみると、19世紀アメリカ・ロマン派の文豪ナサニエル・ホーソーン的第一長編『緋文字』*The Scarlet Letter* (1850年)で姦通を犯した女主人公ヘスター・プリンのスティグマとしてフィーチャーされる“A”という記号表現が“adultery”のみならず“able”や“angel”など、ネガティブな意味合いからポジティブな意味合いまで多彩な記号内容のスペクトラムを織りなすことの背後には、明らかにニューイングランド初等読本における図像学的伝統への挑戦と、その時代錯誤的な応用が読み取れよう。特に最終場面に着目したい。

It bore a device, a herald's wording of which might serve for a motto and brief description of our now concluded legend; so sombre is it, and relieved only by one ever-glowing point of light gloomier than the shadow: ----

“ON A FIELD, SABLE, THE LETTER A, GULES.”

(*The Scarlet Letter* [1850; New York: Norton, 1988], 178, emphasis mine)

標準的なエンブレムが短いモットー (inscription) と図像 (picture)、それを説明する詩文 (subscription) という三つの部位から成立するとすれば、この最終場面におけるホーソーンの記述は明らかにエンブレムの伝統に則している。『緋文字』においてはAの文字がエンブレムとも呼ばれることから、これが図像学的物語であることは疑いない。

かくして、同書序文「税関」で明らかにされるように、1849年に民主党ポーク政権からホイッグ党テイラー政権への転換という政変が起こったことで税関の職を失ったホーソーンは、あたかも自らがギロチン台の藻屑と消えるかのような諦念を抱いていたものの、『緋文字』の物語に入ると、同じように晒し台に立つヒロインの未来には確実に希望を見出している。ここには、ストラダイナス以来、植民地がインディアン捕囚体験記のメアリ・ホワイト・ローランソンや女兵士ハンナ・スネル、女水兵ルーシー・ブルーアといった強い女性像に、自己の似姿を見出してきた伝統が踏まえられているだろう。ジョン・ガストが1872年に描き、今日では領土拡張主義政策のスローガン「明白な運命」(Manifest Destiny)の代名詞とされている名画「アメリカの前進」(American Progress)において、フロンティア開拓を主導する自由の女神にも似た巨大な女性像は、その意味で、新世界発見以来連続と織り紡がれた図像学的ジェンダー・ポリティクスの帰結なのである。

## 鯨のエンブレムのトランスアトランティック

“very like a whale” (『ハムレット』3 幕 2 場)

植月恵一郎

新旧両大陸間の文学作品の影響関係を考えるに当たって、ウォラー (Edmund Waller, 1606 - 87) の「サマー諸島の闘い」(“The Battle of the Summer Islands”) とメルヴィル (Herman Melville, 1819 - 91) の『モービー・ディック』(Moby-Dick: or, The Whale, 1851) 関係について以前考察した (『日本大学芸術学部紀要』第 70 号、2019 年、25-35 頁参照)。今回は、言語芸術から視覚芸術に重心を移して再度『モービー・ディック』を考察してみた。

この長編小説冒頭の古今東西の文献からの「引用抜粋」、作品中の視覚芸術に対するこだわり、とくに、第 55 章「鯨の奇怪な絵について」(Of the Monstrous Pictures of Whales)、第 56 章「さほど誤りのない鯨の絵、および捕鯨現場の事実を伝える絵について」(Of the Less Erroneous Pictures of Whales, and the True Pictures of Whaling Scenes)、第 57 章「油絵、歯、木材、鉄板、石材、山脈、星座に描かれた鯨について」(Of Whales in Paint; in Teeth; in Wood; in Sheet-Iron; in Stone; in Mountains; in Stars) で言及された鯨に関する数々の図像、そしてそれに付随する文章、筆者には、「引用抜粋」はエンブレムのモットーに、視覚芸術に対する言及はエンブレムの図像部分に、それに付随する文章はエピグラムのようにも思える。簡潔に言えば、『モービー・ディック』自体が、鯨に関する巨大なエンブレム集のように見える。

シャフェルトン (Frank Shuffelton) は、「引用抜粋」は小説本体に対して「胚芽を含む種」(germinous seeds) と言い、「最小の説明になっている点で最大に胚芽的だ」(most “germinous” in being least explained) と述べ、Epigraph を使っている点にも注目し、これは引用から成るモットーでもあると言う (Shuffelton 98-100)。こうした考えの延長として、『モービー・ディック』をエンブレムと解釈したい動機が、この批評家にも伺えると思う。

単に形式的なだけではない。第 99 章「ダブロン金貨」(The Doubloon) では、追い求める白鯨を仕留めた褒賞であるこの金貨は、ピークオッド号のメインマストに釘付けにされているが、この小さな金貨の図像を巡って、乗組員が次々と登場しては独自の解釈を示していく。エイハブの「人は苦痛に生き、悲痛のうちに死ぬものだ」(man should live in pains and die in pangs!) という解釈に始まり、何かを「メインマストに釘付けにする」(nailed to the mast) というのは不吉の謂いで、「白鯨がエイハブを直撃する」(he (the White Whale) 'll nail ye (Ahab!)) という意味だというピップの解釈に至るまで、一つのエンブレムの様々な読解方法を示唆している。

本論では、『モービー・ディック』第 55 章でさりげなく暗示されたアルドゥス (Aldus Pius Manutius, c. 1450 - 1515) の商標である「錨とイルカ」の図像に注目した。

「製本屋の鯨が葡萄の蔓のように、下降する錨の幹の周囲に巻き付いたものについては——多くの新・旧の書物の背表紙やタイトルページに刻印されたり、金メッキされているようなもので——それはひじょうに絵になるが、純然たる想像上の生き物で、古代の壺の図を真似たものだと思う。広くイルカと呼ばれているが、にもかかわらずこの製本屋の魚は鯨を試みたものだと思う。最初にその意匠が導入されたとき、そういう意図だったからだ。それは古いイタリアの出版業者が 15 世紀頃、文芸復興の時期に導入したもので、当時も、比較的最近の時代になっても、イルカはレヴィアタンの種類と民衆には思われていた」。(From chap. 55, Moby-Dick)

この図像に *festina lente* (急がば回れ *hasten slowly*) のモットーが添えられているのだが、エラスムス (Desiderius Erasmus, 1466? - 1536) の『格言集』(Adagiorum chiliades, 1508) 第二巻冒頭の記述によると、元々デナリウス (古代ローマの銀貨) の図像で、ローマ皇帝ティトゥス (Titus Flavius Vespasianus, 39 - 81) が在位していた 79~81 年の間に鑄造されたものだと云う (Erasmus 132-55)。しかもこの版の出版を請け負ったのが、アルドゥスであった。

さらに、それ以前に初代ローマ皇帝アウグストゥス (Gaius Julius Caesar Octavianus, 63 B.C. - A.D. 14) のモットーが「急がば回れ」で、その在位期間 27 B.C.~A.D. 14 に鑄造された金貨で蝶と蟹の意匠のものがあり、この図像とスエトニウス (Gaius Suetonius Tranquillus, c. 70 - c. 140) の『ローマ皇帝伝』(De vita Caesarum, c. 119) でのアウグストゥスに関する記述によるモットーが結びついた可能性もあり、その影響の痕跡は、ホイットニー (Geoffrey Whitney, c. 1548 - c. 1601) の『エンブレム集』(A Choice of Emblemes and Other Devises, 1585) にみることができる。

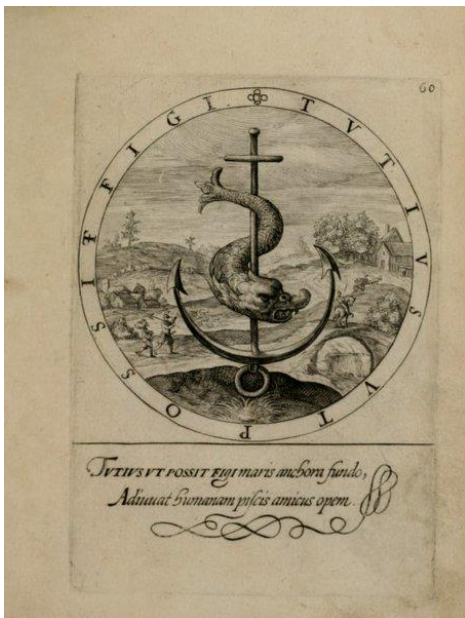
さて、話を「錨とイルカ」の図像に戻そう。『モービー・ディック』第 32 章「鯨学」(cetology) でも述べて

いるが、生物学的に鯨とイルカは同類（クジラ目の哺乳類）で、OEDの *dolphin* の定義も *A species of cetaceous mammal* となっており、「イルカとクジラのあいだに大きなちがいはなく、イルカは小型のクジラにすぎない」（荒俣宏『世界大博物図鑑 哺乳類』平凡社、1988.4、398頁）。

図版は、ロレンハーゲン（Georg Rollenhagen, 1542 - 1609）の「錨とイルカ」で、錨がより安全に海の底に届いているようにと、人間に忠実な魚（イルカ）は、人間の仕事を助ける様子を示している。

しかし、錨の歴史は古く、「碇」という字が用いられたことからわかるように、古代には石や石をL字形の木片に縛ったものが用いられた。一方、英語の *anchor* の語源はギリシア語の *agkyra*（〈曲がったもの〉〈鉤（かぎ）〉の意）に由来し、錨の左右の鉤は *fluke*、柄や幹の部分は *shank* と呼ばれ、*fluke* は「(槍・やす・矢などの穂先の)かかり、鉤(*barb*)」の意味であり、錨は *hook*, *angle* でもあり、*angle* は *fishhook* でもある。さらに *fluke* には「鯨の尾鰭《左右の一方》, [pl] 鯨の尾」という鯨の側に立った意味もあり、捕鯨に際して攻撃する側される側両者を示す言葉である。

これは魚を捕らえるときの道具である *trident*「三叉のやす」を思わせ、神話で云うポセイドンの三叉槍 (*Trident*) をも連想させるのではないだろうか。『モービー・ディック』第3章「抹香鯨亭」(*The Spouter-Inn*) の例を挙げると、その宿の入口に大きな絵画が掛けられているのだが、燻っていて判然とせず、推測の域を出ないものと断ったうえで、一頭の巨鯨が、海中から躍り出て船を飛び越えようとし、今まさに船の三本マストに串刺しになりそうな瞬間を描いた記述がある。筆者には錨とイルカの図像の変形にも思え、錨の上の「十字」形は、追手エイハブの墓標のようにも思える。



さらに再度、ロレンハーゲンの図像の後景に戻ると、4人描かれ、左から右へ向かっている。左から剣を持つ人、矛を持つ人、槍を持つ人、先頭は一頭の馬が干し草を載せた荷車を引き、それを一人が操っている(Daly and Young. “George Wither’s Emblems: The Role of Picture Background and Reader/Viewer,” *Emblematica*, vol. 14, AMS Press, 241)。逆に辿れば、農作業の道具が武器に変化していく様子を示しているとも言えよう。

結局、直接にはアルドゥス出版の商標から、間接にはティトゥス帝の銀貨の図案から発達したと思える「錨とイルカ」のエムブレムのモットーは、ティトゥスでは急がば回れ、アルチャートでは、君主は臣下の安全に配慮する、ロレンハーゲンでは、より安全に固定されるようになどと変化するものの、図像としては不変である。錨の鉤爪と十字はエイハブやピークオッド号の乗組員の、イルカは白鯨の寓意であり、『モービー・ディック』という作品をもっともよく表したエムブレムの一つである。希望や安定を意味する〈錨〉のエムブレムは、今もロードアイランド州の州旗や人気者の〈ポパイ〉の前腕部のタトゥーにも見られることも示唆した。

## 参考文献

- Erasmus, Desiderius. *The Adages of Erasmus*. Selected by William Barker, University of Toronto Press, 2001.
- Shuffelton, Frank. “Going Through the Long Vaticans: Melville’s ‘Extracts’ in *Moby-Dick*,” in *Herman Melville’s Moby-Dick: A Sourcebook*. Ed. Michael J. Davey, Routledge, 2004. pp. 98-100.
- Veldman, Ilja, and Klein, Clara. “The Painter and the Poet: The Nucleus Emblematum by De Passe and Rollenhagen”, in Enenkel, Karl A. E. and Visser, Arnoud S. Q. (eds.) *Mundus Emblematicus: Studies in Neo-Latin Emblem Books*. Brepols, pp. 267-299, 2003.